

23 中国古代における予後診断

和田 裕 一

論者は、二松学舎大学在学中に中国医学に関心を持ち、以後ライフワークと位置付け、中国とくに古代の医学技術とその変遷をテーマに研究してきた。

これまで論者は、時代的には『論語』の紀元前五世紀から『史記』の紀元前一世紀を経て、『三国志』の三世紀までのおよそ八百年間を扱ってきた。もちろんこの八百年間を精緻に分析するまでには到底及んでいないが、それぞれの時代のエッセンスというべき要素については見逃すことなく指摘してきたつもりである。

論者としては、これまで各時代について断層的に扱ってきたのを一度集約する意味で、編年的に医療技術について論じたい。だが、医療技術と言っても多岐にわたり、論者の能力では限界がある。そこで今回は、「予後診断」を一つの軸として、これまで扱ってきた時代を縦貫する

形で私見を述べたい。もとより「予後診断」は医療技術のごく一部ではあるが、中国古代医学の記述を読む上で外せない視点であり、またその他の医療技術を含めた本当の意味での集約は、後日論文として発表する所存である。

予後診断、あるいは「予知」は、中国医学において極めて多数見られるキー・ワードの一つである。『傷寒論』や『金匱要略』にも、後人の付記と考えられる部分に予後の予測についての記述が見られるほか、「三国志」の華陀や『史記』の扁鵲、淳于意にも同様の記述が見られる。

たとえば、すでに前述の第九九回大会で発表した、『三国志』「魏志方技伝」に見られる華陀の全二十一症例のうち、六例で死を予知している。小説である『三国志演義』に比して神秘性の薄い正史においてもこのような記述が見られることには注目を要する。

また扁鵲は、有名な斉の桓侯のエピソードで、望診によつて病気の進行を繰り返し警告し、最後に手遅れとなつたと判断して亡命している。

「扁鵲、斉の桓侯に見ゆ。立ちて問有り、扁鵲曰わく、『君に疾有り(中略)治せざれば將に恐らくは深からんとす』と。(中略)扁鵲、桓侯を望みて還り走る。桓侯人をしてこれを問わしむ。扁鵲曰わく、『(中略)今や骨髓に在り、臣是を以て請う無きなり』と。居ること五日、桓侯体痛む。人をして扁鵲を索めしむるも、已に秦に逃れたり。桓侯遂に死す。』(『韓非子』喻老篇)

同じく、扁鵲より先に『春秋左氏伝』に登場する医師「緩」も予後診断を行っている。

「公(晋侯)、疾病なり。醫を秦に求む。秦但、醫緩をして之を為めしむ。未だ至らざるに、公、夢に、疾、二豎子と為りて曰く、『彼は良醫なり。懼らくは我を傷らん。焉にか之を逃れん』と。其の一曰く、『膏の上、盲の下に居らば、我を若何にせん』と。醫至りて曰く、『疾為む可からざるなり。膏の上、盲の下に在り。之を攻むるも可ならず、之に達せんとすとも及ばず、薬も至らず、為む可からざるなり』と。』(『春秋左氏伝』成公十年)

この「緩」のエピソードは、「病膏盲」という熟語として今日まで残っている。

淳于意もこの技術を用いている。

「五色病を診、人の死生を知り、嫌疑を決し、治すべきを定む。及び薬論甚だ精し。之れを受くること三年、人の為に病を治し、死生を決するに驗多し。』(『史記』扁鵲倉公列伝)

論者は今回、これらの記述をもとに、医療技術の中でしばしば登場する予後診断について述べたい。

(インフォメーション・オン・デマンド株式会社)